

青くて広い空、澄んだ空気の中、1時間ほど英語学習のためにラジオを聞きながらドライブをしてビーチにたどり着く。風に運ばれて聞こえてくる波の音。大人も子供も時を忘れて遊ぶ。シドニーで初めてビーチに行った時、シドニーで初めて日本語を教えた時、それは、初めて北越谷の駅に降り立ち出津橋を渡ったあの日の感覚と同じ。あの日、私は18歳になったばかりだった。自分のことを大人だとか子供だとか、勉強ができるだとか、できないだとか、どんな評価もしていなかった。ただ、ワクワクしていた。初めて毎日私服を来て、メイクをして、自分で決めて行動できることに、時間を忘れて全てに没頭するほどワクワクしていた。ダンス部に入った。先輩達がすごく大人に見えた。憧れた。友達の下宿先によく泊めてもらい、たくさん笑って話した。一生懸命勉強した記憶はあまりない。でも、海外に目を向けるようになったのは、あの大学時代からだ。大学が開催していた地域のための英会話教室に通った。少人数で近所の人と一緒に外国人の先生から英語を学んだ。ハロウィンにはかぼちゃに飾り付けをし、クリスマスにはパーティーをした。中国語は、中国人の先生方から学んだ。中国の本のページをめくるたびに、異文化の世界が広がった。携帯もコンピューターもない時代だった。卒論は手書きで、外国は遠い場所にあった。でも今私は、オーストラリアという多文化社会の移民という立場で、子供を育てながら現地校で日本語教師として毎日をすごしている。約40年前、北越谷で発生したワクワク感と外国への興味が、細い糸のようになって海を渡り、今度は私が次の世代にワクワクする経験と世界を学ぶ楽しさを伝える番だと奮闘している。それが、文教大学への恩返しになればと思いながら。